

中野 康人さん

関西学院大社会学部准教授

「声」のこえー読者投稿の計量テキスト分析

日本人の第二次世界大戦に対する記憶や意識がどのように変化しているのか、新聞に掲載された読者投稿欄を分析し、研究している。

留学していたオランダでは、日本が話題に上がると戦争の話も語られるが、日本ではオランダと戦争は絡められないなど、戦争に対する両国のギャップを感じた。こうし

た違和感などをきっかけに、約四年前から研究している。

二つの全国紙を使う。新聞投稿欄は住所、氏名、年齢、職業が記載され、非常に貴重

な個人情報といえる。そのデータから「戦争」といった単語などを抽出したり、それらの単語と年齢や職業を絡めて分析したりして、研究を進めている。分析結果からいろいろ

なかの・やすと
1971年生まれ。
東北大学院文学
研究科社会学専攻
博士後期課程修
了。戦争や環境、
景観などに対す
る、意識調査の分
析などを研究。

「戦争認識」の変遷追う

ろなことがみえてくる。

両紙とも平均年齢は約四十九歳。職業でみると、主婦と無職で約40%から半数を占め、会社員約10%、小中高生約5%など、世の中の職業分布とある程度合致する。

一方の新聞では、一九九〇年代前半まで教育者が「戦争」をよく使っていたが、二〇〇〇年以降は無職が多用している。これは一つの世代が、戦争について語り掛けているためとみられる。

「責任」という単語を「戦争」と絡めて分析すると、年々、両紙で減少している。これは戦争についての責任論議が退潮していることを示すとい

える。「平和」と「悲惨」は約二十年間、両紙で共通して戦争と絡めて使われている。「語り継ぐ」や「伝える」

を「戦争」と絡めた場合、両紙で十五年ほど前から出始めた。今後、どのようにして戦争の記憶を伝えるのかという課題を、読者も認識している。ことを浮き彫りにしている。

オランダで感じた違和感をぬぐうのはもちろん、人々の意見がどのように変動し、どういった人たちが意見を変え

るのか。この研究で予測できたら、と考えている。(5月15日、関西学院大の先端社会研究所定期研究会で)

(まとめ・堀内達成)